FUKUSHIMA 市民インタビュー

このコーナーでは、福島市のさまざまな分野で活躍する人や団体を紹介します。今回は、福島市との合併当時から飯野町の情報発信を行い、今年で発足10年になる「いいのコミュニティネットワーク」会長の阿部好宏（あべよしひろ）さんにインタビューしました。

いいのコミュニティネットワーク
会長　阿部好宏さん

発足のきっかけは？

福島市と合併する前に「飯野町まちづくり委員会」が組織され、私は広報部門の委員になりました。その後、平成20年の合併に伴い、ふるさと飯野町をもっと全国に発信しようと委員会のメンバーの有志を中心に発足させたのが「いいのコミュニティネットワーク」です。現在は、主婦から企業の社長まで幅広い層で構成する18人の会員で活動しています。

活動内容は？

飯野町情報サイト「いいのこむねっと」の運営、SNS（ツイッター、フェイスブック）を活用した飯野町の情報発信を行っています。また、動画やネットラジオなども作成し、配信しています。

今はスマートフォンなどで手軽に誰でも、お金をかけずに情報の発信・受信ができるので、SNSに特に力を入れています。SNS担当の会員が楽しんで投稿しているので、くだけた雰囲気で飯野町の情報を発信しています。フォロワー（自分の投稿を見られるように登録した人）とのコミュニケーションも大事にしていますね。

私たちの活動資金は会員からの会費のみなので、大きな事業はできていませんが、その代わり会員のフットワークの軽さには自信があります。お金をかけずに「無理なく、楽しく」をモットーに10年続けてきました。こういった私たちの活動が、飯野町だけでなく、市内の他の地域に波及すればいいなと思っています。

活動していてうれしかったことは？

最近だと、ふくしまPR動画コンテスト2017で私たちの作品がグランプリを受賞したことですね。みんなで「やったー！」と喜びました。飯野町の方からの反響が多く「見たよ」と声を掛けていただきました。「飯野つるし雛まつり」を紹介する動画だったため、つるし雛まつり実行委員の方々からも喜ばれ、たくさんPRに使用してもらえました。飯野町のためになったという実感が持て、頑張って動画を作って良かったなと思っています。

今後の展望は？

飯野町PRキャラクター「ユータン」、UFOふれあい館の宇宙人「正太朗」、つるし雛まつりPRキャラクター「ひなポン」のラインスタンプ（コミュニケーションアプリ上での会話に使うイラスト）の作成をしたいと考えています。使ってもらえれば、それだけで飯野町のPRになりますからね。

飯野町についてまだまだ知られていない部分があると思うので、もっと皆さんに知っていただけるように、細く長く発信し続けていきます。

We Love♥ ふくしま！

第３回『認知症と向き合おう』

平昌2018オリンピック・パラリンピックが閉幕しました。

フィギュアスケートの羽生結弦（はにゅうゆづる）選手をはじめ、日本人選手のメダルラッシュ。福島市在住のパラリンピック　アルペンスキー日本代表の鈴木猛史（すずきたけし）選手も奮闘し、大いに盛り上げてくれました。韓国というと、スピードスケートの小平奈緒（こだいらなお）選手と李相花（イサンファ）選手の涙の抱擁もあって、親近感が増したのではないでしょうか。

私が韓国で思い浮かべるのが韓国映画「私の頭の中の消しゴム」です。若年性アルツハイマーに侵され記憶が消えゆく妻と、支え尽くそうとする夫との物語は涙を誘います。と同時に、私がアルツハイマーや認知症を強く認識するきっかけでもありました。

高齢化が進んだ今、高齢者の15%が認知症だそうです。映画のように若年でも発症します。誰でもかかりうる身近な病気なのです。自分が、家族が、認知症かもしれないということは、しっかりした人であればあるほど、認めたくないかもしれません。でも、気付きが遅れるほど症状は進行してしまう。そんなはずでは…という気持ちが自分を苦しめ、また本人と家族との感情に軋轢（あつれき）を生じさせます。認知症を苦に自ら命を絶つ、家族を殺めてしまうなど深刻な事態も少なくありません。

認知症は、糖尿病や高血圧症などの生活習慣病に気を付けていれば、その予防になります。早期に気付いて対処法を知っていれば、進行を遅らせることができたり、ありのままを受容し、良好な家族関係を維持していけたりします。社会的に協力して対応することも必要です。要は、認知症にしっかり向き合い、正しく理解して協力し合うことが大事なのです。

市では、認知症サポーター養成講座を開設しています。自分のため、家族のためにも受講してみてはいかがでしょう。

▲森合地区で行われた認知症サポーター養成講座

福島市長　木幡（こはた）　浩（ひろし）